



皇室夜話



馬三郎

序

みなさま、こんばんわ。私はヒエダノアレーと申す者でございます。今まで天皇陛下や皇室に関する色々な話をさせてもらいましたが、今宵は皆様にとっては興味深い夜の営みについて語らせていただこうと思います。天皇陛下や皇室の方々がどのような夜の営みをなさっておられるのか、興味深いことではございましょうから、私も少々緊張いたしております。それでも、私の拙い語りでも御見聞していただけるなら、これ以上の喜びはございません。ですから、私も力まぎらずに語っていきこうと思っております。

さて、前置きが長くなりましたが、これから皇室の方々の夜の営みについて語らせていただきます。

一章

まずは皇太子様からでございます。

朝から夜まで続いた長い結婚の儀式を終えられ、皇太子様とお妃様はようやく寝室に入られました。お二人にとって今日は初夜でございます。寝室はというと真中にダブルベッドがおいてあり、入って右側にバスルーム、左側に簡単な洗面所とトイレ、それに中に机をはさんでソファが二つ置いてありました。

「どうです。疲れましたか？」

皇太子様がおっしゃいました。

「ええ、少し」とお妃様は下を向いて答えられました。皇太子様はソファのところに行き、

「ここで少し休みましょう」と促されました。

「ええ」とお妃様は答えられ、ソファのところまで行かれました。

お二人がソファに座られますと皇太子様は両手を上にあげ、大きなのびをうたれました。それから、

「何か、飲み物を持ってこさせましょうか？」と訊かれました。

「ええ」とお妃様が答えられると、

「何が良いでしょうか？」

皇太子様がまた訊かれました。

「レモンティーが良いですわ」とお妃様はお答えなされました。

「温かいのが良いですか、冷たいのが良いですか？」

「温かいのが良いです」

皇太子様も、

「私も同じものにしましょうか」と独り言をおっしゃると部屋に取り付けてあるインターホンの

ところまで行かれました。そこで、

「ホットレモンティーを二つ持ってきてください」とお伝えなされ、ソファのところで戻られました。それから、二人はとりとめのない雑談をなされました。皇太子様は熱心にクラシックの音楽についてうんちくを語られました。そうして十分か二十分か経った頃に皇居の付き添えの者がレモンティーを持ってきました。付き添えの者は盆にのせたレモン

ティーをこぼさないようにゆっくり歩いてきて、お二人の前にレモンティーを丁寧に置きました。それから、

「失礼します」とお辞儀をして言うと、ゆっくりと寝室から出て行きました。付き添いの者が出ていくと、さっそくお二人はレモンティーに砂糖とレモンをお入れなされました。お妃様はフー、フーと息を吹きかけておさましなされると、ゆっくりと味わい深くお飲みになされました。それに反して皇太子様はカップを持って一気に飲まれました。皇太子様はアチーと奇声を発せられると同時に口に入れたレモンティーを全部吹き出しなされました。向かいに座っていたお妃様はキャットとおっしゃられ、素早くよけられました。皇太子様はレモンティーを吹き出しなされた後、洗面所に向かって飛ぶように走っていかれ、水を出して、それを自分の口にあてられました。お妃様はハッと我に返られますと皇太子様のおられる洗面所に走って行かれました。

「殿下、どうなさいました？」

皇太子様は水から口をお離しなさり、

「すみません、猫舌なもので。口の中を火傷したように思います」とおっしゃり、再び口に水をあてられました。少し経ってからお妃様は、

「大丈夫でございますか？私にできることがあったら何でもおおせくださいますし」とまた声をおかけになさいました。皇太子様はやっと水から口を離せられますと、

「もう大丈夫です。心配をかけてすみません」とおっしゃいました。その後、お二人はソファアのところに戻られますと静かに腰かけられました。

「何か食べながら飲んだ方が良いのではないですか？」

お妃様が提案なさいました。

「そうですね。何を食べたいですか？」

お妃様は少し考えられますと、

「夕食は食べましたから、軽い物が良いですね」とおっしゃりました。

「クッキーなんかどうでしょうか？」

「クッキーですか。それも良いですね」と皇太子様はおっしゃり、インターホンのところまで行かれました。

「クッキーを持ってきてください」とおっしゃるとソファアのところに戻られました。

しばらくすると、さっきと同じ付き添いの方があらわれ、クッキーを持ってきました。

「これで良いでしょうか？」と付き添えの者が言うと、皇太子様は、

「良いです」とおっしゃられました。

「それでは失礼させていただきます」と言い、付き添えの者は部屋から出て行きました。

「それでは」と皇太子様はおっしゃりました。「味の方はいかがでしょうか？」

一方、お妃様はクッキーを一つつまんで、じっとそれを御覧になされました。動物の形をしたクッキーでした。

「まあ、かわいい。キリンの形をしたクッキーですわ」とおっしゃいましたが、ポイツと口の中

にクッキーを投げ込み、ゆっくりと噛んで味わっておられました。

「美味しいですわ」とお妃様がおっしゃると皇太子様は顔が明るくなり、

「そうですか。私も食べてみましょうか」とおっしゃりました。

皇太子様はウサギの形のクッキーをお取りになり、ひとかじりなさいました。

「確かに美味しいですね」とおっしゃると、皇太子様もゆっくりと噛み砕き、味わいなさっておられました。そうして、お二人でクッキーを食べていらっしゃいますと、お妃様が、

「もう、レモンティーがぬるくなってしまったのではないですか」とおっしゃいました。それをお聞きになると皇太子様は今度はレモンティーをゆっくりと口に運びなさいました。

「妃が言ったとおり確かにぬるくなっています」

皇太子様はすこし安堵なさったようです。そうして皇太子様とお妃様はクッキーとレモンティーを味わっていらっしゃいました。結局、クッキーを少しだけ残して食事は終わりなさいました。皇太子様は時計を御覧になされました。八時半を少し回ったところでした。

「まだ早いですね。ゲームでもしますか？」

皇太子様はおっしゃいました。

「ええ、良いです」

「では、将棋はどうですか？」

「できません」

「囲碁はどうですか？」

「それもできません」

「では、オセロはいかがですか？」

「それならできます」とお妃様はおっしゃられました。皇太子様は立ち上がるとインターホンのところへ行かれ、オセロゲームを持ってくるように伝えられました。少し経ってから、付き添いの者がオセロゲームを持ってまいりました。付き添いの者が去るとさっそく皇太子様は、

「先手が良いですか。後手が良いですか？」とおっしゃられました。

「じゃんけんで決めましょう」

じゃんけんをなされると皇太子様はチョキをだされ、お妃様はグーをお出しになされました。お妃様が先手とおっしゃるとさっそくゲームが始まりました。お妃様が皇太子様の痛いところをおつきになさりますと皇太子様は、

「なかなか強いですね」と感心なされました。けれども終盤になると皇太子様が有利になられました。そこで突然、皇太子様が、

「あれはしたことがありますか？」とおっしゃいました。

「あれとは？」とお妃様はびっくりしてお訊きになされました。

「夜の営みのことです」と皇太子様がおっしゃいました。

「したことはございませぬ」

お妃様は少しうつむいて顔を赤らめなされました。

「それでは私たちは処女と童貞の交わりになりますな」と皇太子様が笑みをこぼしておっしゃいました。結局、オセロは皇太子様の勝ちで終わられました。皇太子様はオセロゲームを片づけな

さりますと、

「では、入りましょうか?」とおっしゃいました。

「どこへですか?」とお妃様が尋ねなさりますと、皇太子様は、

「お風呂ですよ」とおっしゃいました。

「一緒に入るのですか?」

「そうです」

「先に殿下がお入りになさるんじゃないのですか?」

「違いますよ。二人、一緒に入るのです」

「そんな。恥ずかしいですわ」

「私だって恥ずかしいですよ。でも一緒に入った方が親ぼく感が増すというではないですか」

そうおっしゃってから、皇太子様は風呂場に行かれて湯船に湯をお入れ始めなさいました。しばらくして、湯加減を確かめてられてから、またお妃様のもとへ帰ってこられました。

「どうです。決まりましたか?」

「殿下にお任せしますわ」

「それでは一緒に入りましょうか」

そうおっしゃると皇太子様は服をお脱ぎ始められました。上着をお脱ぎなされたところで、また皇太子様は風呂場に行かれました。湯船に湯がいっぱいになるのを御覧になって、湯をお止めになられ、脱衣所に来て服をお脱ぎ始められました。パンツを脱がれますと風呂場に入って、

「良い湯加減ですよ」とおっしゃいました。お妃様は、

「はい」と返事なさいますと服をお脱ぎ始められました。それでも、下着姿になられると躊躇なされてそのまま立ち尽くしなさいました。すると皇太子様が風呂場から顔を出され、

「早く、いらっしやいよ。お湯がぬるくなってしまうですよ」とおっしゃられました。お妃様はそれで覚悟をお決めになられたのか、ブラジャーとパンツをお脱ぎなされました。たわわな乳房と陰部があらわれました。それでも恥ずかしいのか、体にタオルを巻いて風呂場に入られました

。

「タオルを巻いていたのではしょうがないじゃありませんか」

「だって恥ずかしいんですもの」

お妃様はそのまま立ち尽くしてしまわれました。

「さあ、私のように全部脱いで」と皇太子様がおっしゃるとお妃様は決心してタオルをとられました。

「綺麗な体だ」

「あまりジロジロ見ないでください」

お妃様は手で乳房と陰部をお隠しなさいました。

「さあ、一緒に湯船に浸かりましょう」と皇太子様はおっしゃり、湯船の半分をお開けなさいました。そこへお妃様がゆっくりとお入りなされました。

「良い湯加減ですね」とお妃様もおっしゃいました。それから、お二人でとりとめのない話をなさっているうちにお妃様の緊張感が薄らいでいくようでした。

「あっ、そうですね。私、面白い物を持ってきたのです」

「面白い物って何ですか？」

するとお妃様はウフフと笑って、

「まだ秘密ですわ」と答えられました。それから、しばらく沈黙が流れました。

「秘密と言われると余計に知りたくなるな」

それでもお妃様は、

「まだ秘密です」とおっしゃいました。それから、また、お二人は雑談をなさり始められました。そして十分程たった頃でしょうか、皇太子様は、

「もう体も温まったことでしょうか、体を洗いましょう」とおっしゃいました。するとお妃様が、

「ちょっと待ってください」とおっしゃいました。

「何です」

皇太子様はキョトンとなされました。

「秘密の物を持ってまいりますから」とお妃様はおっしゃって風呂場からお出になられました。ですが、すぐにお妃様は色んな物を持って戻ってこられました。

「何ですか?それは」

「これが秘密の物ですわ」

そうおっしゃって持ってきた物を床にお置きになられました。それはというと、何重にも畳であるマット、空気入れ、ローションの入った瓶でした。

「これは何なんですか？」

「友達に教えてもらったんです。これを使うと気持ちが良いということらしいんです。世間でいうマットプレイというものらしいんです」

「はあ」

お妃様の言葉に皇太子様は口をアングリとお開けなさっておられました。

「まずマットをふくらませるんです」

そうおっしゃって空気入りの管の先をマットの吸引口に持っていかれました。

「殿下、すみませんがマットを膨らましてもらえませんか？」

口を開けたまま、茫然となさっていた皇太子様は我に返られますと、

「わかりました」とおっしゃいました。マットを膨らますのは難儀なことなのか、だいぶ汗をかかれました。マットが膨らみますと皇太子様は、

「ああ、疲れた」とおっしゃって湯船の近くに腰かけなさいました。そして湯船から風呂桶をお使いになって湯を体にかけて、汗を流されました。お妃様はマットの吸引口をお閉めになされまますと瓶に入っていたローションをマットの上に垂らされました。

「準備ができました」とお妃様がおっしゃると皇太子様は疲れがとれたのか、お妃様の方へ歩いて行かれました。

「マットの上で横になってください」とお妃様がおっしゃると皇太子様はその通りになされました。お妃様は皇太子様のお体にローションをおかけなさると自分にもローションをおかけにな

さいました。そうして、お二人は抱き合いなされるとお妃様の方からぬるぬるのお体を動かさなされました。

「あっ、気持ち良い」

皇太子様はそうお声を発せられ、自分からもお体を動かさなされました。

「私も気持ち良いですわ」

お妃様はそうおっしゃると自分から皇太子様の上へ乗りかかれなさいました。

「まず、私が上に乗りますから、次に殿下が上になってください」

「わかりました」と皇太子様はおっしゃるとお妃様の下に潜り込まれました。お妃様のピンとたった乳首、ごわごわとした陰毛を感じなされますと皇太子様の陰茎はピンピンに勃起しました。お妃様は初めてとは思えないほど上手くお体を動かされ、皇太子様は何度でもアッアッとお声をこぼされました。十分程お妃様が上で動きなさいますと皇太子様は、

「次は私の番ですね?」とおっしゃいました。

「そうしますか」とお妃様が返答なされますと、ぬるぬるのお体を上手く反転なさせて皇太子様が上になられました。皇太子様のピンピンに起った陰茎がお体の上で動きますと、お妃様も、

「気持ち良いです。気持ち良いです」と快感に酔いしられて、声を発せられました。その声を聞かれますと皇太子様はもっとお体を激しく動かさなされました。ところが激しくすぎる程動かさなされたのか、足でマットを思い切り蹴られますと、皇太子様はお妃様のお体を通りこして壁に向かって飛んでいかれました。アチャパーという奇声を発せられ、頭を浴室の壁に思い切りぶつけなさいりました。お妃様は快感に溺れてか、ハアハアと息遣い荒々しくなさせておられました。皇太子様はぶつけた頭が痛くて、頭を両手で押さえて身もだえなさせておられました。そのうち快感が途絶えてきたのか、お妃様は皇太子様を御覧になさいりますと、

「あら」とおっしゃって皇太子様のところへ行かれました。両手で頭をかかえて悶絶なさせておられる皇太子様を御覧になられると、

「大丈夫ですか?」とおっしゃって皇太子様の頭をなでられました。

「大丈夫です。あまり頭を触らないでください」

「はい」とおっしゃってお妃様は皇太子様の様子を御覧になさせておられました。何分か経つと皇太子様の身もだえも収まってきて、動きも少なくなっていかりました。それから心配そうに見つめていらっしゃるお妃様に向かって、

「だいぶ頭痛も収まってきました」とおっしゃりました。

「それは良かったです」

それから、マットの方を御覧になって、

「これらはしまっておきましょうか」とおっしゃられました。お妃様はローションでぬるぬるになっているマットの吸引口開いて空気を抜こうとなさいりました。しかし、マットがローションでぬるぬるにになっていたのでマットを押さえつけるのは大層、難儀なことでした。そのうち頭痛も治ったのか、皇太子様も、

「手伝いますよ」とおっしゃり、お二人でマットの空気をお抜きになられました。

「私達の体もぬるぬるですね。早く洗いましょう」

皇太子様は腰かけを二つ持ってこられました。

「二人で洗いあいっこをしましょう」と皇太子様がおっしゃると、お二人はお互いに向き合ってお体を洗いなされました。お妃様の乳房をお洗いになさっていると皇太子様は再び欲情なされたのか、さっきまで小さくなっていたいちもつがまた勃起しました。

「かわいいですわね」とお妃様はおっしゃると皇太子様の勃起した陰部を優しくお洗いなされました。

「背中を洗いましょう」

皇太子様はお妃様の背後に回り、石鹸のついたタオルで背中をお洗いなさいました。次にお妃様が皇太子様の背後にお行きになって皇太子様の背中をお洗いなさいました。その時、お妃様はサービスで乳房を皇太子様のお体に密着なさいました。

「ああ、気持ち良い」

皇太子様は恍惚とした表情を浮かべなさいました。それから、お二人で体にお湯をおかけになさって体中についた石鹸の泡を流されました。

「今度はタオルで拭き合いっこしましょう」と皇太子様はおっしゃい、タオルでお妃様のお体をお拭きなさり、体中についた水分を拭き取りなさいました。お妃様も同じようになされました。タオルでお体をお拭きなさるとバスロープを着なさり、ベッドの方へ向かわれました。お二人はバスロープを脱ぎ、全裸のまま布団の中に入られました。しばらくベッドで横になっておられましたが、皇太子様は何もおっしゃらずにお妃様の上に乗られました。

「目を閉じてください」と皇太子様がおっしゃると少し固くなっているお妃様に接吻をなされました。お妃様の唇に舌をお入れなさると、お妃様は少し戸惑いながらも皇太子様の舌に自分の舌をくっつきなされました。長い接吻が終わると皇太子様は口づけをどんどん下に向かってなさっていかれました。特に乳首を舐めなされたときはお妃様が、

「気持ち良いですわ」とおっしゃり、身悶えなさる程でした。皇太子様が乳房をお揉みなされ、乳首に何度も口づけなさるとお妃様はアッ、アッと息遣いも荒くなさり、身悶えも激しくなりました。次に皇太子様がお妃様の陰部をお触りなさいますとアッ、アーッと声を張り上げなさいました。

「気持ち良いですか?」と皇太子様がお訊きになられますと、

「気持ち良いです」とお妃様も返事なされました。皇太子様がお妃様の陰部をお舐めになさいますとお妃様の身悶えもさらに激しくなりました。皇太子様がお妃様の陰部、特に陰核を中心に激しくお舐めなさいますとお妃様は、

「アーッ、駄目です。失神しそうです」とおっしゃられ布団をわしづかみにつかまれました。愛液の量もかなり増えました。

「だいぶ濡れてますよ」

「そんな、恥ずかしいですわ」

お妃様は身悶えなさり、快感に溺れなさっておられました。

「それでは入れますか」

皇太子様は腰をお妃様の両腿の間に入れなさり、挿入の準備をなされました。そして腰をお

もいっきりお妃様の陰部目指して前にお出しになされました。ところが、皇太子様の陰茎がお妃様の恥骨にあたり、そそり起っていた陰茎が曲がってしまいました。アチュパーと奇声を発せなされますと皇太子様は上に飛び上がられました。そうして天井に頭をぶつけなされ、下に落下なされました。ベッドの上に尻もちしなされますと頭に手をあて、陰茎を握って激しく悶絶なされました。今まで長い恍惚感にひたっておられたお妃様は皇太子様の様子を御覧になって、

「殿下、どうなさったのです?」とおっしゃい、皇太子様の近くに寄られました。

「何でもございません。ちょっと失敗しただけです」

それでも皇太子様の悶絶は止まりませんでした。

「タオルに水を濡らしてまいりますから」

お妃様はタオルを洗面所で濡らして戻ってこられました。それを皇太子様の頭と陰茎に当てられました。

「ああ、良くなりました。痛みもひいていくようです」と皇太子様はおっしゃり、身もだえもだんだん収まっていくようでした。そして、だいぶ復活なされたのか、

「さあ、続きをしましょう」とおっしゃり、お妃様と横になられました。再び、接吻して陰部を愛撫なさいました。お妃様はアッアッと悶え声をあげ感じていらっしゃるようでした。陰部も少々乾きかけていたのが、愛液で徐々に濡れていきました。

「それでは入れますよ」と皇太子様がおっしゃり、お妃様はお体を固くして身構えなさいました。再び、お妃様の両腿の間に入られると、えいっ、とおっしゃって腰を前に突き出されました。陰茎は見事にお妃様の膣に入りました。ところが今度はお妃様が、

「痛い」とおっしゃい、皇太子様の左ほおを平手でおもいきりぶたれました。皇太子様はハウーと奇声を上げられ、右の方に飛んで行かれました。そして寝室のぶち当り、ぐったりと、そこで失神なさいました。お妃様はあまりの痛さに膣を押さえておられました。しかし、少し時間が経つと膣の痛みが治まったのか、お妃様は周囲を見回されました。すると壁にもたれて失神なされておられる皇太子様を発見なされ、近くに飛んで行かれました。

「殿下、大丈夫ですか?殿下」

お妃様は皇太子様のお体を激しく揺さぶられました。それでも皇太子様が起きられなされないのか、お妃様は洗面所に行って水を桶に入れて持ってこられました。それを皇太子様におかけなされると皇太子様はチメターと奇声をあげられ、また上に飛び上がられました。再び、天井に頭をぶつけられ、落下なされると床にお尻をぶつけなされました。皇太子様は頭とお尻を押さえ激しく悶絶なされました。

「殿下、すみませぬ。つい、死んでしまわれたのかと思って水をかけてしまいました。私が悪うございました」

「お気かけなさいてください。大丈夫です」

それでも方々の痛みが治らないのか、何度も身もだえをなさっておられました。また、お妃様がタオルを濡らしてこられました。

「これをお付けください」

「ありがとうございます」

皇太子様はタオルを方々に当てられました。そうこうしているうちに痛みが減ったのか、身もだえも収まってきました。皇太子様は壁に背をもたれかけて座られ、タオルを頭に当てていらっしゃいました。

「さて、続きをしましょうか」

「まだ無理でございませぬ。それに今度はもっとゆっくりと入れてください」

「わかりました」

皇太子様とお妃様はそこで静かになさっておられました。が、しばらくすると皇太子様は立ち上がりなされ、ベッドの方に歩き始められました。お妃様も皇太子様の後を追われました。ベッドに戻られますと再び、皇太子様の愛撫が始まりました。口と胸、そして陰部を丹念に舐められました。するとお妃様もアッアッとあえぎ声を発され、身悶えなさり、愛液もまた、たくさん出てまいりました。

「気持ち良いです、殿下」とお妃様は獣のように叫ばれました。皇太子様も再びお妃様の両腿の間に入られますと、膣の穴を開き、ゆっくりと挿入なされました。

「痛いですか？」

「大丈夫です」

「それでは動かしますよ」と皇太子様はおっしゃい、ピストン運動をなされ始められました。するとお妃様が、

「やっぱり痛い」とおっしゃって、また皇太子様の左ほおをはつられました。皇太子様はハッと奇声を発せられると、また寢室の壁に向かって飛んで行かれ、壁に激突なされますと、そのまま床にうずくまれました。お妃様はしばらくの間、膣を押さえていらっしゃいましたが、皇太子様のお姿を御覧になされると、そのそばに飛んで行かれました。

「大丈夫ですか、殿下」

お妃様は皇太子様のお体を揺さぶられました。皇太子様は、

「大丈夫です。ちょっと右腕が痛いくらいです」と嘘をつかれました。お妃様をご心配なさらないようにするための嘘でした。本当はお体中に痛みがはしっておられました。お妃様はまた洗面所に行ってタオルを濡らして戻ってこられました。タオルを当てなされると皇太子様の痛みもやわらいでいくようでした。

「もう、だいぶ痛みがましになりました」

皇太子様は壁にもたれて座り、タオルを当てておられました。そうして幾分かの間が経ち、皇太子様も回復なさいますと、

「さあ、はじめましょうか」とおっしゃり、ベッドの方へ歩かれました。お妃様も後につかれました。お二人はベッドに入られ皇太子様の愛撫が始まりました。徐々にお妃様も感じなされ、

「気持ち良い」とおっしゃりました。

「そう言ってもらうと、私も嬉しいです」

皇太子様が口や胸、そして陰部も愛撫なされると愛液もだいぶ出てきました。

「それでは、入れます」

お妃様は身を固めて、

「ゆっくり、優しくお入れなさってください」とおっしゃりました。皇太子様は膣の穴を確かめてゆっくりと挿入なさりました。そして、ほんのしばらくの間、お二人はそのままの状態でおられました。

「なんだか、このままでいると二人が一体になったみたいですね?」とお妃様がおっしゃいますと、皇太子様も、

「そうですね」と返されました。何分か経ったのか、そのままお二人は静かになさっておられました。

「そろそろ、腰を動かしますよ」とおっしゃると皇太子様はゆっくり、腰を動かさなされました。お妃様はしっかりと目を閉じて身構えなさりました。ピストン運動はだんだん速くなってきました。

「痛いですか?」

「大丈夫です」

「もっと速くしますよ」

お妃様は目をおもいきり閉じなされ、布団をしっかりと握りしめられました。皇太子様はそれから何分かピストン運動をなされると、

「アッ、出ます。出ます」とおっしゃって精液を出されました。

「終わったのですか?」とお妃様がおっしゃると、

「ええ、終わりました。痛くなかったですか」

「大丈夫でした」

それから、お妃様は、

「キスしていただけますか」とおっしゃいました。

「ええ、いいですよ」

皇太子様は軽くキスをなさりました。そして、お妃様の傍で横になられ、

「疲れませんでしたか?」と尋ねられました。

「ええ、少し疲れました」

「私はかなり疲れました。もう眠りたい気分です」

それから、お二人は静かにしておられました。すると皇太子様が寝息をたて始めなさりました。

「殿下、お眠りなされたのですか?」とお妃様が問われましたが、返事はありませんでした。お妃様も寝ようと思ひ、静かになさっておられました。そうして何分か経ったところでお眠りになさりました。これで皇太子様とお妃様の初夜は終わりました。

二章

それでは次は皇太子様の弟である菥篠宮殿下の夜の営みについての話を始めましょう。

夕食も済み、子供達が眠られますと、やっとお二人の時間になりました。でも、菥篠宮殿下の気分は憂鬱でございました。なぜかという、あそこが元気にならないからです。

「子供達は寝ましたわ」

そう言って、お妃様が寝室に入ってくださいました。

「そうですか」

萩篠宮殿下がお答えなさいました。

「今日はどうですか。おやりになりますか。それとも止められますか?」とお妃様が尋ねますと、座椅子に座っておられた萩篠宮殿下は拳を顎に当てて考えられました。しばらくして手をおろされまますと、

「なんとか、やってみましょう」と答えられました。

「今日はあそこが元気になるのですか?」

「わかりません。でもトライしてみしましょう」と萩篠宮殿下はおっしゃり、続けて、

「シャワーを浴びましょう。妃は先が良いですか?後が良いですか?」とお訊きになられました。

「どちらでもいいですわ」とお妃様は答えられました。

「では、私が先に入りましょう」

萩篠宮殿下は服をお脱ぎになり、シャワーを浴びられました。戻ってくると、

「気持ち良かったですよ。お妃様も浴びてください」とお妃様をそくされました。

「わかりました」

お妃様はすぐ風呂場にむかわれ、シャワーを浴びてこられました。それから、お二人でベッドに行き、バスローブを脱がれました。お妃様は均整のとれた綺麗なお体でした。でも、萩篠宮殿下のいちもつは元気になりませんでした。

「今日も駄目なようですね」とお妃様がおっしゃいました。

「すみません」

「そんな、謝らないでください。それより、あれは飲まれたのですか?」

「栄養ドリンクですか?」

「ええ、そうです」

「飲みましたが」

「あまり、効果がありませんね?」

「そうですね」と萩篠宮殿下はおっしゃるとバスローブを羽織りなさって冷蔵庫のところに行き、中から栄養ドリンクを取り出され、一気に飲まれました。そしてベッドのところに戻ってこられました。お妃様の裸をゆっくり、御覧なさいましたが、それでも、あそこは元気になりませんでした。

「殿下、横になってください」

萩篠宮殿下はバスローブをお脱ぎになり、横になられました。そうしてお妃様は萩篠宮殿下の股のところに行き、そのいちもつを優しくお触りました。

「あっ、気持ち良いです」と萩篠宮殿下はおっしゃいましたが、いちもつの方はちょっと固くなった程度で到底、勃起したとはおもえない程でした。お妃様は口を使ってフェラチオをなさいましたが、それでもちょっと固くなった程度でした。

「駄目ですね」とお妃様はおっしゃいました。「私の裸では駄目なのでしょうか?」

「そんなことはないです。たぶん他の女性でも同じでしょうから」

「そうでしょうか？」

「そうですよ。きっと」

「それなら、一度こういうことに関する専門のお医者様に診てもらったらどうでしょうか」

菫篠宮殿下は考えこまれました。それから、お体を起こしなさせてベッドに座られ、自分のジロジロと見たり、手でしごいたりなさいました。それでも勃起したりはしませんでした。

「そうですね。妃の言うとおりにしてみましょう」

後日、菫篠宮殿下はこういうEDに関する専門の医者に見てもらいました。菫篠宮殿下は今までのいきさつをお伝えなさいました。

「はあ、そうですか。それは困ったことですね」

そう言って、医者は精力増強の薬を出しました。

「まずはこれで試してください」

菫篠宮殿下は邸宅にお帰りなさいました。そうして、その日の晩にさっそく効果があるかどうかお試しなさいました。

「やっぱり駄目ですね」

お妃様とベッドで裸になられて菫篠宮殿下はそうおっしゃいました。

「そのようですね。でも、まだ薬を飲み始めたばかりですから、もう少し薬を飲み続けられたら良いと思いますけど」

そして、一カ月程、菫篠宮殿下は薬を飲み続けられました。

「どうやら駄目ですね」

菫篠宮殿下はお妃様と裸でベッドに座ってそうおっしゃいました。

「もう一度、お医者様のところへ行かれたらどうですか？」

「そうしましょう」

翌日、菫篠宮殿下はまた同じ医者の所に行かれました。

「そうですか、あの薬でも駄目ですか」

菫篠宮殿下から、話を聞き、医者はそう言いました。

「では、ちょっと別のアプローチをしてみましょう」

医者は立ち上がって奥に行き、何やら雑誌みたいな物をどっさり持って戻ってきました。

「これを御覧ください」と医者は言って、裸の可愛い女の子が写った写真を見せました。

「この写真がどうかしたのですか？」

「これを見てもあそこは勃起しませんか？」

「そうですね」

菫篠宮殿下は股を御覧になっておっしゃいました。

「勃起しません」

医者は色々、可愛い女の子の裸の写真を見せました。それでも菫篠宮殿下のあそこは勃起しませんでした。

「仕方がありませんな」

医者はまた奥に行って別の雑誌を持ってきました。

「これならどうです？」

そこに写っていたのは縄で縛られ、宙づりにされている女性の裸体でした。おお、とおっしゃり、萩篠宮殿下はその写真を食い入るように御覧になられました。そうすると萩篠宮殿下のいちもつはピンピンに勃起しました。

「先生、起ちました。勃起しました」

「そうですか。それは良かったです」

「でも先生、こういうので勃起するのは変態なのではないですか？」

医者は机の上にペンを置くとちょっと考えてから、言いました。

「殿下、人間には色々な欲望があります。食欲、性欲、独占欲などがそうです。でも人間には厄介な欲望があります。それは攻撃欲です」

「はい」

「この攻撃欲と性欲とが一緒になったのがSMです。他人をいじめて性欲が増すのがサディスト、逆に他人にいじめられて興奮するのがマゾフィストです」

「では先生、私はサディストなのでしょうか？」

「殿下、最後まで話を聞いてください」

「はい」

「先に述べたように性欲と攻撃欲が合体したものがSMの原点です。この攻撃欲が外に向かって例えば、女性や子供に対して性欲が発散するのがサディストです。これとは逆に攻撃欲が内に向かって、つまり自分自身などに対して発散される人達がマゾフィストなのです。ですから、サディストもマゾフィストも根本では同じなのです。それが外に向かうか、内に向かうかというだけの違いなのです。ですから、マゾフィストの人達はどんな攻撃をされても喜ぶと思ったら大間違いなのです。マゾフィストの人達は自分の思った通りのいじめられ方をされて初めて性欲が発散されるのです。サディストも同じで他人に言われたとおりにいじめても性欲は発散されません。自分が思うようにいじめないと性欲は発散できないのです。だから、今までサディストであったのが急にマゾフィストになったり、その逆もありえるのです。ですから、マゾフィストであるからといって情けない人間だとか、サディストだからといって残酷な人間であるということは一概にはいえないのです」

「では先生、私はサディストでもあり、マゾフィストでもあるということですか」

「はい、そうです」

医者は一枚の写真を見せました。それは一人の裸の若い男がぶら下がり台のようなものにぶら下げられ、黒いレザースーツを着た女に鞭を打たれている写真でした。萩篠宮殿下は唾を飲み込まれると、

「先生、また勃起しました」とおっしゃいました。

「そうですか」

「それでは先生、私はこんなSMの世界にいなければ性欲は発散できないのですか？」

「今のところはそうです」

「治る見込みはないのですか？」

「それはわかりません」医者は続けて言いました。「とりあえず今のところは性欲を発散させたければ、SMの世界に入らざるを得ないということです」

「そうですか」

菫篠宮殿下は肩を落とされました。そして家に帰られるとさっそく医者に言われたことをお妃様におっしゃいました。

「まあ、そんなことになっているのですか」

お妃様は驚きなさって、そうおっしゃりました。それから、お二人は医者から貰ったビデオを御覧になさいました。それは裸の若い男が黒のレザースーツに身をまとった女にいたぶられるという内容のものでした。

「私もこういうことをしなければならぬのですか？」

「そうです」

「困ったことですね」

「妃、どうか、この女の役をやらしてもらえませんか」

菫篠宮殿下は懇願なされました。

「私にこんな役ができるかどうか・・・」

お妃様は困惑なさいました。

「とにかく一度やってみましょう。道具は子供達にみつからないよう、離れに置いておきますから」

「そうですか。殿下の頼みならば、やらなければなりませんね」

後日、SMの道具がそろうとお妃様は菫篠宮殿下と一緒に離れの部屋へ行かれました。そこには物凄い物が置いてありました。張り付け台に鉄パイプのベッド、吊り下げ台などがありました。

「物凄い光景ですね」

お妃様は驚かれたように、そうおっしゃいました。

「さあ、始めましょう」

菫篠宮殿下はさっそく裸になられました。お妃様も裸になられ、恐る恐るレザースーツを身にまといられました。まずは吊り下げ台でした。菫篠宮殿下が吊り下げ台に両手を縛られ、吊り下げられました。お妃様はぶるぶる震えなさりながら鞭で菫篠宮殿下を叩かれました。

「あっ、痛い」

「大丈夫ですか？」

「そんなことを言っては駄目です。もっと叩いてください」

「わかりました」とおっしゃると、お妃様はまた叩かれました。

「あっ、痛い。でも、気持ち良いです」

菫篠宮殿下のいちもつは見事に勃起しました。

「殿下、勃起しています」

「そんな、言い方でなく、もっと女王様のように言ってください」

お妃様は戸惑いながらも、

「おほほほ、あなたの大事なところが勃起してるわよ」とおっしゃいました。さらに続けて、
「こんな感じですか?」とお訊きになられました。

「そうです。そういう感じです」

約五分程、吊り下げ台におられたでしょうか。次は張り付け台に行かれました。菘篠宮殿下の両手と両足を張り付け台にくくりつけられ、身動きができないようになさいました。そこで、お妃様は先と同じように鞭で菘篠宮殿下を叩かれました。

「あっ、気持ち良いです」

菘篠宮殿下のあそこは隆々と勃起しておりました。次に水かけをなさいました。菘篠宮殿下は水をかけられますと

「冷たい。でも、気持ち良い」とおっしゃいました。

それから、局部に水をかけられますと身動きができないお体をくねくねさせながら、身悶えなさいました。

「気持ち良いですか?」

「そんな言い方ではなく、もっと女王様のように言ってください」

また、お妃様は戸惑われなさると、

「おほほほ、気持ち良いでしょう」とおっしゃいました。

「はい、気持ち良いです」

そうして最後にベッドに行かれました。ベッドでも菘篠宮殿下は両手と両足を縛られ、身動きできないようになさいました。今度は蠟燭を垂らされました。

「熱い、でも気持ち良いです」

菘篠宮殿下のあそこはピンピンに起っていました。そして、蠟燭の蝋でお体が見えないくらいになりました。それから、菘篠宮殿下は身悶えなさり、

「あっ、出ます。出そうです。速く私をあそこをいらってください」とおっしゃいました。お妃様が慌ててあそこをお触りになりますと、あっという間に精液が出ました。精液を出されますと、お妃様は菘篠宮殿下の両手と両足をご自由になさりました。菘篠宮殿下はハアハアと激しく息遣いをなさっておりましたが、だんだん静まっていかれるようでした。菘篠宮殿下のお体には蝋が沢山付いていました。

「殿下、お風呂に行って蝋を落とさなければならぬのじゃありませんか?」

「ええ、そうですね。もう、そろそろ行きましょう」

風呂に行ってお体も綺麗になさってから、お二人は本殿の方に戻って行かれました。こうして菘篠宮殿下とお妃様の激しい夜は終わっていきました。

三章

最後は天皇陛下の出番です。さっそく始めましょう。

「どうですか、今晚、あれをしませんか?」

夕食が済んでから、天皇陛下が皇后さまにおっしゃいました。

「今日、するのですか？」

「ええ、そうです」

「あそこは元気になれるのですか？」

「いえ、そんなことは分かりませんが面白い物を手に入れましたので」

「面白い物って何ですか？」

「それは秘密です」

「何か変な感じですね」

それから、夜も更けてから、

「さあ、始めましょう」と天皇陛下が皇后様におっしゃいました。お二人は寝室に入られるとさっそく裸になりました。

「やっぱり、あそこは起ちませんね」と皇后様がおっしゃられました。

「では、秘密の物を持ってまいります」

天皇陛下は奥に行つてがさごと何かをお探しになさいました。

「ありました。ありました」と天皇陛下はおっしゃり、何か小さな物を持ってベッドに戻つてこられました。それは鶉の卵をちょっと大きくしたバイブレーターでした。

「何ですか、それは？」

「まあ、見ててください」

天皇陛下がバイブレターのスイッチをオンになさいますと、ビーンという音を立ててバイブレーターは心地の良い振動をし始めました。

「どうです。面白いでしょう？」

「何か変な気がしますわ」

「では、ちょっと様子見を」

天皇陛下はバイブレーターを皇后様の陰部に持っていかれ、優しくなでられました。皇后様はゾクツとして身をひかられました。

「あまり、動かないでください」と天皇陛下がおっしゃられました。

「何か、ゾクゾクとしますわ」

「それがいいのです」

天皇陛下は皇后様のあそこに当てられました。すると皇后様はアッアッと喘ぎ声を出され、身悶えなさいました。愛液も出てきたようです。しばらくして天皇陛下が、

「次は私の番ですよ」とおっしゃいました。皇后様が動いたままのバイブレーターをお持ちなさると、それを天皇陛下のあそこに当てられました。天皇陛下の陰部をまんべんなくお当てになりますと、天皇陛下はアッアッと喘ぎ声をあげられました。そして天皇陛下のいちもつがどんどん大きくなっていきました。

「まあ」と皇后様は驚きなさいました。続いてバイブレーターを天皇陛下のあそこへお当て続けなさいました。

「アッ、気持ち良いです」と天皇陛下はお言葉を発せなさいました。もはや、天皇陛下のあそこはピンピンに勃起していました。

「皇后様、横になってください」

皇后様が横になられますと、その上に天皇陛下がお乗りなさいました。天皇陛下は大きくなっ
たいちもつを皇后様のあそこへお入れになさいました。

「ああ、久しぶりですわ、この感触」

「そうですね。そうですね」と天皇陛下がおっしゃられました。それから、天皇陛下はピス
トン運動を始めなさいました。

「アッ、気持ち良いですわ」

「私もです」とお二人は我を忘れて快樂の世界に身を委ねられました。そうして、幾分経った後
に天皇陛下は射精なさいました。そして皇后様の横に寝転ばれなさいました。

「久しぶりに女としての喜びに達しました」と皇后様がおっしゃると、天皇陛下は、

「そう言ってもらえて、私も嬉しいです」とおっしゃりました。それから、お二人とも、服を着
られますとベッドに横になられました。すると、天皇陛下が皇后様の手を握られました。皇后
様もまた握り返しなさいました。そして夜も更けていき、お二人は夢の世界へと入っていかれま
した。